

伝統的な技術力で、今の時代感覚をトレースする。



せっこう

石膏型職人

吉橋賢一(エム・エム・ヨシハシ)

愛知県瀬戸市



vol.3

繊細な彫細工の陰影が生み出す洗練されたデザイン

当初、目指していたのはファッションデザインの仕事。ある時、洋服のパターンを作るのも陶磁器の型を作るのも同じ事と気づき、それならば自分のブランドベースを選択するべきだと決心し家業を継ぐことになる。ファッションを志していた吉橋さんが手掛ける商品は、とても洗練されているデザインばかり。「ボクは、シンプルなものが好きなんです。」と吉橋さんは話す。飾りを足し上げるよりも、むしろ引くことを追求。その引いた先に最上のデザインが形として現れることにこだわりを見せる若き石膏型職人。



デザイナーとのコラボ商品の一部。
ニット柄ラタン柄の湯のみ

「せともの」の語源でもある陶磁器の産地。愛知県瀬戸市

1300年の歴史と高い技術力で伝統工芸品から家庭食器、生活雑貨、ノベルティ等、「瀬戸には作れない陶磁器はない。」とまで言われている瀬戸の焼き物。陶器市として開催される、4月の陶祖まつり、9月のせともの祭では、多くの観光客で街はにぎわいます。散策では、窯道具で築かれた壁や塀が並ぶ窯垣の小径(こみち)が楽しい。



提案する型屋。自社ブランド「彫付(HORITSUKE)」を展開

陶磁器の型を作る仕事は、通常、窯元から依頼されて型をつくる受注生産。海外からの安価な陶磁器におされ、国内の陶磁器産業の低迷が続くなか、自分たちで型を作り、窯元へ焼いてもらおうと始めたのが、提案型の自社ブランド「彫付」。繊細な彫細工の模様を付加価値にした新たなものづくりを展開しています。



手づくりの道具で原型を彫っていく



原型から石膏型をつくる

工房は楽しい遊び場だ

石膏のかけらで落書き。石膏型に隠れてかくれんぼ。働いている父を見ながら自分は育ったし、自分の子どもにも働いている姿を見せることができるのはいいことだと思う。吉橋さんのお子さんの夢は「お茶碗を作る人」とのこと。



庭から出土することもある、昔の「型」

出土したのは、富士山をモチーフにした型。ものは試しにその型から試作品で小皿を作ってみたとのこと(笑)また吉橋さんの愛犬が掘った穴から出てきたのが陶器でできた学生服のボタン。昭和30年頃まで瀬戸で実際に使われていたそうです。瀬戸ならではの珍品！



陶器でできた学生服ボタン



富士山をモチーフにした型と試作品

振り返って確かめることができるのが、この街の魅力

瀬戸の20世紀をテーマに建設された瀬戸蔵ミュージアム。やきもの工場や石炭窯などを再現しているほか、「やきものまち瀬戸」の歴史をたどれる数多くの作品が展示されています。「もともと陶磁器業界を志望していなかった自分にとって、今でも勉強になることが多いんです。」と話す吉橋さん。歴史や文化に学ぶことは多いと、たびたび同施設を訪れては、いい刺激をもらっているという。



手間をかけて作る「せともの」もある



何でも作れる瀬戸ではあるが、それゆえに瀬戸焼の特徴がはっきりしないのも事実。また、「せとものは、量産品」というイメージも、今の時代には合っていない気がする。先達者が積み上げてきた高い技術力を付加価値として発信していきたい。ひとつひとつ丁寧に

手間ひまかけて作るせとものもあるんだ、という新しい流れを作りたいと、吉橋さんは語る。

枠外にはみだして、独自の型をつくりだす

「実は、あまり表に出たくないタイプなんです。」とはにかむ吉橋さん。とはいえ、自社ブランド「彫付」では窯元に逆提案するなど、業界の枠をはみだした型やぶりなもの(笑)いろいろな業界とつきあって自分たちの立ち位置を見ることが大事にしているという吉橋さんに、今の時代感覚に合った職人のスタイルを感じさせる。

